



全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol. 33 (Jan. 2018)



防火帯焼きの様子（長崎県諫早市／福藺恵子氏提供）

全国草原の里市町村連絡協議会総会の開催（新年のご挨拶をかねて）

全国草原再生ネットワーク会長 高橋佳孝

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。昨年末からの寒波の連続で、山上の草原は銀世界に変わり、日常では目にすることのない趣や風情を醸し出しています。四季の移ろいもそれもまた草原の魅力の一つだといえます。

昨年は、ちょうど全国草原サミット開催の前年ということで、さらなる飛躍に向けての足場固めの年と位置づけておりました。しかし、早春に各地で草原火入れに関する事故、とくに火付け役の方の事故が多く発生し、改めて草原を維持することの困難さと地元の担い手不足が危機的状況にあることを再認識させられる事となりました。

このような状況の中、一昨年に発足した「全国草原の里市町村連絡協議会（通称：自治体ネット）」の定時総会が、昨年（平成 29 年）の 11 月 29 日（水）に東京の全国町村会館において開催されました。現在、この協議会の加入自治体は 23 市町村で、そのうちの 10 市町村が総会に出席しました。会長の日高昭彦川南町長の進行のもと、29 年度の事業、予算の中間報告と当面重点化すべき課題を論議しました。

本年 5 月 12 日～14 日に宮崎県で開催される「第 12 回全国草原サミット・シンポジウム」に関しては、本大会への出席を促し、次々回開催地をサミット当日までには決めることを

申し合わせました。所用で急遽出席できなくなった太田長八東伊豆町長より、東伊豆町での開催に前向きな意見をいただいたことから、東伊豆町を次々回開催地の第一候補として今後調整を進めていくことになりました。

「草原の里 100 選」の制定については、第 10 回全国草原サミット・シンポジウム阿蘇大会の「サミット宣言」を受け、平成 27 年に阿蘇市長村会より環境大臣宛に要望を行ったところですが、近々、新たに環境省に出向き、同連絡協議会名で再度協力を要請することになりました。また、最近頻発している野焼き（火入れ）事故に関しての情報交換を密にしていくこと、新規加入を促すことなどを決定しました。



全国草原の里市町村連絡協議会（通称：自治体ネット）の定時総会の様子

言うまでもなく、本年の最大のイベントは間近に迫った「第 12 回全国草原サミット・シンポジウム in 串間・川南（宮崎）大会」です。同連絡協議会発足後初めてとなるこのシンポジウムやサミットでは、南九州を舞台にした草原・湿原保全の新しい動き、遺産・文化財としての草原の価値の見直し、豊かな草原環境を生かした地域の魅力づくりなどが紹介され、同協議会の加入市町村を中心に草原を有する自

治体が一層連携を深め、貴重な地域資源を後世に引き継ぐために行動することが宣言されるものと思われます。民間と国や市町村とが情報交流を密にし、お互いが手を携え補填し合うという観点からも全国草原サミット・シンポジウムの存在は極めて重要です。串間・川南（宮崎）大会へ向けて、会員の皆様の一層のご理解とご協力が必要となりますが、引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

第12回全国草原サミット・シンポジウムに向けて

第12回全国草原サミット・シンポジウム in 串間・川南大会

第3回・第4回実行委員会を開催しました（中村正樹：川南町教育委員会）

平成29年10月3日（火）及び平成29年11月15日（水）に宮崎県公立大学地域研究センターにおいて、「第12回全国草原サミット・シンポジウム in 串間・川南大会」の第3回及び第4回実行委員会を開催しました。

前回会議で決定した役割分担に基づき、シンポジウム部会（串間市担当）、サミット部会（川南町担当）から内容が提案され、各々の内容について協議を行いました。シンポジウム部会では、基調講演や分科会の具体的な内容が提案され、各分科会のテーマや企画運営団体、コーディネーター、事例発表者の検討を行いました。

また、サミット部会からは、ミニシンポジウム（湿原に特化する）の内容の検討及びサミットの参加依頼団体やサミット宣言（案）について、協議を行いました。現地見学会については、都井岬（串間市）と川南湿原（川南町）を見学することが決定しており、見学時間等の細かな部分を協議しました。

各々の内容については、詳細を詰める部分が多くありますが、今後、第5回、第6回の実行委員会で細部について協議を行い、参加いただいた皆様が充実した時間を過ごせる大会となるよう準備を進めて参りますので、多くの方の参加をよろしくお願ひします。

なお、参加申込受付は、平成30年1月下旬を予定しております。



第12回全国草原サミット・シンポジウム in 串間・川南大会

【開催地】宮崎県串間市、川南町

【開催日】平成30年5月12日（土）～14日（月）

【日程詳細】12日（土）：シンポジウム（基調講演、分科会）（会場）串間市

13日（日）：現地見学会（都井岬（串間市）及び川南湿原（川南町））

交流会（会場）川南町

14日（月）：シンポジウム及びサミット（会場）川南町

【シンポジウム 串間市（12日）】

13:00 開会・基調講演	分科会
14:00 事例報告	第1分科会：草原・湿原環境と生物多様性
15:00 分科会	第2分科会：草原環境と持続可能な観光活用
17:00 全体会	第3分科会：草原と人の生活文化
18:30 閉会	第4分科会：保全活動の継承と安全対策

【サミット 川南町（14日）】

ミニシンポジウム日程：

9:00 開会・講演
10:25 事例発表・パネルディスカッション
11:50 講評

サミット日程：

12:30 開会（活動報告、問題提起）
14:40 サミット宣言採択
15:00 閉会

※各日程及び内容については、変更する場合があります。

各地からの報告

隠岐諸島 島前 西ノ島の草原と馬事

(岩田光太：東京都在住)

先日訪問してきた島根県隠岐郡西ノ島町の草原と馬事について報告いたします。

西ノ島では牛馬の放牧頭数減少および放牧庄の異なる牛馬の構成比率の変化等から、草地が荒れている牧野がでており、良質な牧草が不足していると感じている農家もあるようでした。また、マダニの発生も懸念されており、火入れ等の対策が望まれているものの、行政を巻き込んだ対策には至っていない様子でした。また、家畜に対する害獣として「カラス」が挙げられ、その対策に苦慮している状況でした。

<写真1(下)>

洞庭藍(トウテイラン)。西ノ島の牧野内部ではあまり見かけませんでしたが、牧野外の随所できれいな青い花を見かけることが出来ました。実生で良く育つため、花壇の彩にも活用されていました。



<写真2・写真3(下と右上)>

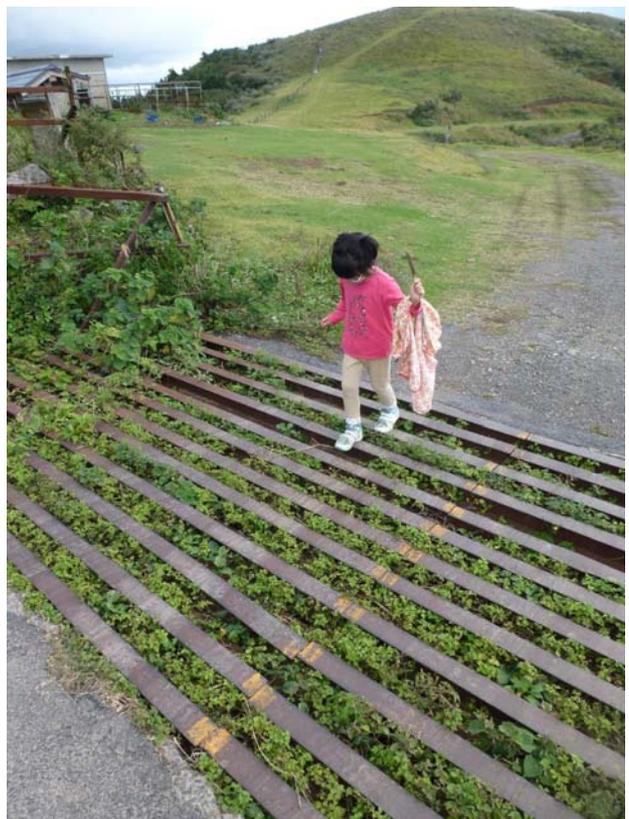
達磨菊(ダルマガク)。西ノ島の国賀海岸(国賀浦)



から見える大きな岩に美しく群生していました。岩肌に絶妙な密度で分布して薄紫色の花を開く一群は、絵画的な美しさを感じさせてくれました。

<写真4(下)>

通称、テキサスゲート。有蹄類が歩行しにくいように路面をスリット状の構造にしたもので、牧野と人間の生活圏の境界に設置されます。車はそのまま通過できるという利点があるため、牧野への人(畜



産農家・観光客等)の往来が頻繁な地域で見ることが出来ます。参考までに、他の設置例としては与那国島(牧野を島の周回道路が貫通している)・開門山麓自然公園(ゴルフ場の敷地の一部にトカラ馬が放牧されている)・マザー牧場(場内牧場地のバスツアーコース上)などがあげられます。

<写真5・6(右)>

西ノ島で放牧されている馬群。農協が管理する種馬(ブルトン種)を各牧に1頭としてハーレムを形成しています。日本の在来馬であった隠岐馬は昭和30年頃に絶滅してしまったとのことです(ふるさとアルバム西郷日本海にうかぶ平成元年3月)。多くの農家は通年放牧・追加給餌・自然交配(「牧替(まきがえ)」を行い、4つの牧の種馬を入れ替えていく)により馬を管理していますが、「カラス」が親馬および仔馬を襲うため分娩時は舎育しているとのことです。大型馬であるブルトンとの交雑種であり力強い馬であることと、通年放牧により馬群が野生化してしまう傾向にあること、および畜産農家の高齢化等により馬の放牧頭数は60頭程度(農家6軒)にまで減少しています。



<写真7(左)>

西ノ島を含む島前(どうぜん)地区は、牧畑(まきはた)といわれる4圃式農業が行われてきた経緯で広大な牧野が受け継がれてきています。牧畑を代表する景観は牧柵としての平積み石垣である間垣(あいがき)をともなうものでしたが、現在の牧野の牧柵は有刺鉄線で維持管理されています。間垣は鬼舞展望所の近くに現存するものが保存・修繕されているの見学できます。

諫早の草原

(福菌恵子：長崎県在住)

1年ほど前から、職場（諫早市こどもの城）の近くにある草原に関わり始めました。この草原は、諫早市で最も標高が高い集落である「大場町」という、標高約200～500mの地域に点在しており、地域住民だけで毎年行う野焼きによって維持されています。住民の高齢化に伴い、「いずれ野焼きができなくなるかもしれない」と知り、保全の手立てを探るため、個人的に月に1～2回の植生調査と、住民に交じって野焼き作業のお手伝いをさせてもらっています。今回は、大場町の野焼きに関わる年間の作業の様子について、現状をお伝えしたいと思います。



岩屋口の草原

男性10名+女性2名（+私）が出席。男性は草刈機を使って、メインの防火帯や道路沿いの草刈をし、女性は鎌を使って周辺に絡む葛を切ります。

急斜面のため作業は非常に厳しく重労働で、メインの斜面に防火帯を作るだけで午前中いっぱいばかりです。午後からは、その他のエリアの防火帯と、生活道路沿いの草払いです。過疎が一番進む片木地

大場町は、瀬々田・岩屋口・片木（へぎ）の3つの集落に分かれており、草原もそれぞれの集落ごとに管理されています。今私がかかわっているのは岩屋口の草原で、3つの中で最も広い草原（約113,000㎡）です。

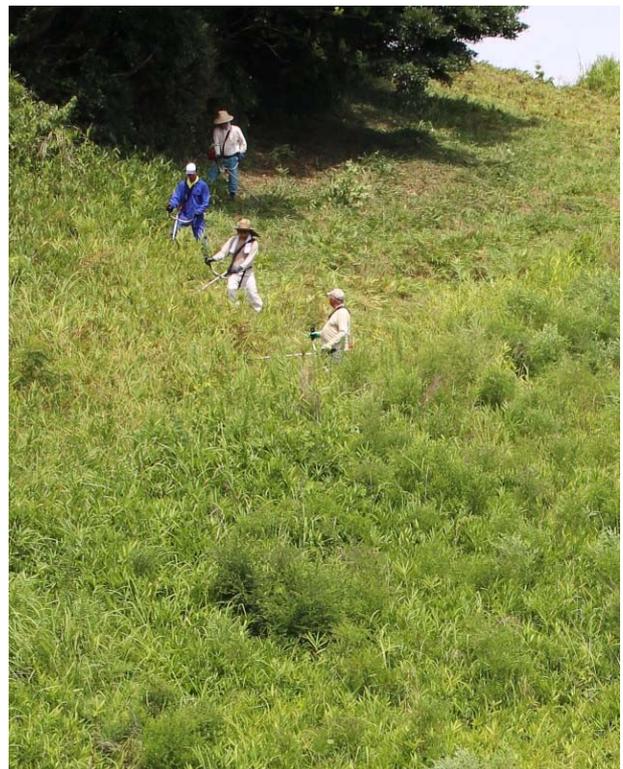
●野焼き

毎年2月末頃の日曜（悪天候の場合は日曜ごとに順延）に予定されており、この日に大場町全体で、集落ごとに時間帯をずらしながら火入れをしていきます。各世帯から男性を中心に1名ずつ出て、大きな消防団を抱える近くの地域から、各集落に1分団ずつ消防団が加勢します。岩屋口は13世帯なので最低13人（60～70歳代）、これに消防団が加わり、約25名の態勢です。作業自体は住民が行い、消防団は水タンクを背負って、飛び火を防ぐ役割を担います。

岩屋口では、火入れをするエリアが3か所。川沿いの下流側、上流側（居住区に近いエリア）、そして一番広い急斜面のエリアです。10時頃下流側から順に火入れを行い、14時頃にはほぼ終了となります。

●防火帯作り

9月の第1日曜日（これも悪天候の場合は日曜ごとに順延）に、草地の森や道路に接する部分を5m幅くらい刈り取る作業をします。これも各世帯最低1名ずつ。今年度は9月3日に実施され、岩屋口は



防火帯づくりの様子

区に岩屋口から 3 名が加勢しに行き、岩屋口は残りの男性 7 名ですべての作業を終えます。朝 8 時からスタートして、17 時過ぎまで丸一日がかりの作業となりました。

●防火帯焼き

草刈一週間後の日曜日に、また住民だけで焼きます。今年度は天候に恵まれ、予定通り 9 月 10 日に実施することができました。消防団は、水を積んだ軽トラが入れない片木だけに入ります。岩屋口は 9 時過ぎから火入れ開始。2 月の野焼きと同じ順で火入れをし、周りに燃え移らないよう、軽トラに積んだ動噴を使って水を撒きながら作業をします。火が逃げそうになったりすると、大声で声をかけあって動きます。普段からの関係性と、顔の見える人数ならではのチームワークです。10 名程度の住民だけで作業し、12 時頃には終了しました。これで、2 月の野焼きの備えは完了です。

元々この草原は、茅葺き屋根の材料や、牛のエサを取るための草場として、生活の中で利用されていたそうです。茅も牛も必要なくなった今では、「日当たりの確保」「山火事防止」「害虫駆除」などの名目で作業が継続されていますが、「焼き続けてきたから、焼き続ける」という方が、住民のみなさんの感覚に近いのではないかと感じています。とはいえ、それ



防火帯焼きの様子

だけの理由では、高齢化が進む中で作業を継続していくのは困難です。

草原は生活空間の中にあり、住民が「暮らし」の中で焼き続けてきた歴史から、今のところ地域外の人間が野焼き作業に入ることはありません（入ったのは恐らく私が初めてです）。草刈も含め、やるべき作業は膨大にあり、継続していくには、地域外からの応援が必要になってきます。

私としても、ずっと続けてきた歴史を途絶えさせたくないとの思いから、方法を探るべく関わり始めましたが、続けるためには、「焼き続けてきたから」だけではない理由も必要だと思います。住民のみなさんの思いも聞きとりながら、「文化の保全」「草原という自然環境の保全」「草原の利用」という視点から、今後も可能性を探っていきたいと考えています。

全国草原リレー（第16回）

ネットワークの会員を中心に、持ち回りで各地の草原を紹介するのが「草原リレー」です。第16回

は、理事でもある阿蘇グリーンストックの山内氏に、阿蘇での最近の取り組みについて紹介して頂きます。

「阿蘇の茅」を地元の収入に！～「阿蘇の茅材」商品化・事業化実証事業の報告～ (山内康二：ネットワーク理事)

グリーンストックでは昨年「ボランティア支援で草原を守る」だけではなく、阿蘇の草資源を何とか地元の新しい経済活動に結び付けられないかと「茅刈りプロジェクト」を始めています。



集落の入り口にあるお土産屋やレストランも茅葺屋根で統一されている。

その中で今年9月、京都と神戸の茅葺き職人の方達に「阿蘇の茅材の商品化・事業化」に向けた需要動向や価格見通しなどについてのヒヤリング調査を行いました。



京都府南丹市美山町にある美山かやぶきの里。計38棟の茅葺民家が残る。

その概要は以下の通りですが、かなりの需要が見込め、うまくやれば地元の農家の新しい収入源として有望であることが分かってきました。春には牧野組合と協力し、茅場の調査や試作品作りに取り組み、来年には事業化の実験段階に入ろうかと考えています。

京都茅葺き職人さんへのヒヤリング調査の概要 ～茅材の需要と供給の現状～

1. 茅葺きには、どんな茅が必要とされているのか

【質】

- ・できるだけまっすぐなものが良い（上の方は少し曲がっていても良いが、軸の部分が曲がっていると使えない）
- ⇒少しの曲りであれば、平積みで保存する際に、茅葺き職人が曲りの方向を補正するように調整して積

んでまっすぐにできる。

- ・枯れてよく乾燥していることも大事。茅を納入してくれるところには「1月20日以降に刈り採って欲しい」とお願いしている。それ以前だと本当に



倉庫の2階には茅が保管されている。下の階に保存した茅はこの時期には既に使用済み。

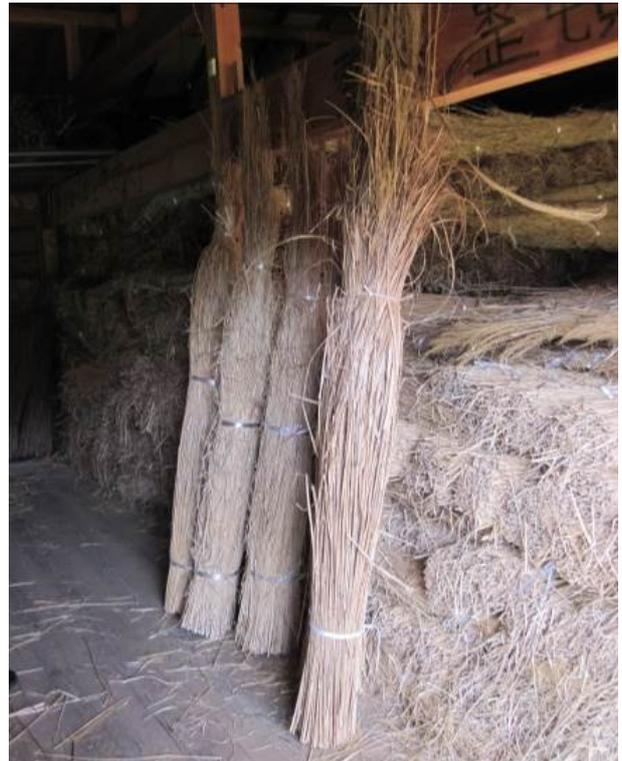
枯れていないことがあり、そういう茅は保管中に腐りやすい。

- ・根元がきっちりと揃っていることが大切。上下逆のものが混ざるのはダメ。
- ・根元の切り口は多少ギザギザでも良い（揃えるために堅い地面に打ち付けると少し割れることもある）。根元をまっすぐに揃えようと切りなおすのはNG。そのままの方が良い。
- ・刈り払い機で刈ったものでも良い。ただし、上下がきちんとしていることが大事。その場合も、根元は切り直しせずそのままが良い。
- ・刈り払い機の刃は頻繁に替える、または研ぐ必要がある

茅葺の世界では「一寸十年」という言葉があり、根元に近いところで刈れば刈るほど屋根を葺いた時に長持ちするとされている。

【サイズ】

- ・高さは特にこれが良いということはない。茅葺屋根には長くて太い茅を使う部分、細い茅を使う部分があるので、どちらも必要。
- ・一般的に、阿蘇の茅は富士の茅よりも茎が細く背も低い傾向がある。茅葺職人にとっては背の高い



富士（御殿場）の茅を並べると、大きさがだいぶ違うことが分かる。富士は大きい（2.6m）。2点縛り。

茅の方が効率的。ただ、細い茅が必要な部分もあるので購入の際に長さで差別化はしていない。

2. 需要の予測

- ・美山茅葺(株)では年間 20 棟くらいの茅葺を受けている。来年までは茅葺の予定が入っている。その次の年は未定。
- ・業界全体（茅葺業界）として、茅が足りていない状態。
- ・美山茅葺(株)では、現在、1 年間で茅（ススキ）は阿蘇から 1 万 5 千束と富士から 3, 4 千束の計約 2 万束、ヨシを琵琶湖から購入している。そのうち 1 年で 6 割を使う。後の 4 割は次年分として保管している（次の年に茅がないと困るため）
- ・美山茅葺(株)だけで、あと茅 1 万束は今すぐにも受入れ可能。もっと多くても良い。
- ・将来的には 3~5 万束位も可能性がある。

【買い取り値段について】

- ・現地渡しで一束 700 円~800 円。根元周囲長 60 cm、高さ 2.2m（阿蘇）~2.6m（富士）、高さで値段は変わらない。細くて締まった茅、太くて長い茅、それぞれの用途がある。
- ・曲ったもの、根元周囲長が細すぎるモノはNG。



美山茅葺(株)の代表 中野さんのご実家。

草原をめぐる動き (2018年1月～2018年4月)

- 1/6 茅刈り体験会ヨシ刈り編 カヤカル@淀川 (場所: 大阪市淀川区淀川河川公園 淀川十三干瀉ヨシ原、連絡先: 茅葺屋)
- 1/20-21 流域連携活動「小貝川と菅生沼の野焼き」(場所: 茨城県常総市小貝川河川敷、茨城県坂東市菅生沼、連絡先: 森林塾青水)
- 1/20 茅刈り体験会&秘密基地づくり (場所: 兵庫県三木市 三木山森林公園、連絡先: 三木山森林公園管理事務所)
- 1/20-21 ヨシ刈り体験 (場所: 宮城県石巻市北上町 北上川ヨシ原、連絡先: NPO 法人りあすの森)
- 1/21 野焼き支援ボランティア初心者研修 (第2回) (場所: 熊本県阿蘇市阿蘇草原保全センター「草原学習館」、連絡先: 公益法人阿蘇グリーンストック) 2/3、2/10、2/22 に第3、4、5回あり
- 1/27 若草山山焼き (場所: 奈良県奈良市奈良公園内 若草山一帯、連絡先: 奈良市観光センター)
- 1/27 本州最南端の火祭り (場所: 和歌山県東牟婁郡串本町潮岬望楼の芝、連絡先: 串本町観光協会)
- 1/28 乙女高原フォーラム～乙女高原、小さな哺乳類たちの暮らしぶり～ (場所: 山梨県山梨市夢わくやまなし、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 2/4 川内峠野焼き (場所: 長崎県平戸市川内峠、連絡先: 平戸市観光課)
- 2/11 大室山山焼き (場所: 静岡県伊東市大室山、連絡先: 大室山リフト)
- 2/18 秋吉台山焼き (場所: 山口県美祢市秋吉台、連絡先: 秋吉台山焼き対策協議会 (美祢市農林課))
- 2月下旬 平尾台野焼き (場所: 福岡県北九州市平尾台、連絡先: 平尾台自然の郷)
- 3月上旬 ヨシ焼き (場所: 山口県山口市阿知須きらら浜自然観察公園、連絡先: きらら浜自然観察公園)
- 3/10-11 茅スグリ・雪原カンジキ体験・キャンドルナイト (場所: 群馬県みなかみ町、連絡先: 森林塾青水)
- 3/11 燃え残り整備 (草刈り) (場所: 山口県美祢市秋吉台、連絡先: 秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局)
- 3/17 渡良瀬遊水地ヨシ焼き (場所: 渡良瀬遊水池、連絡先: 渡良瀬遊水地ヨシ焼き連絡会)
- 3月中旬 生石高原山焼き (場所: 和歌山県有田郡有田川町・紀美野町、連絡先: 有田川町商工観光課)
- 3月中旬 飯田高原野焼き (場所: 大分県玖珠郡九重町、連絡先: 飯田高原野焼き実行委員会)
- 3/27 三瓶山西の原火入れ (場所: 島根県大田市三瓶山、連絡先: 大田市役所)
- 4月上旬 扇山火まつり (場所: 大分県別府市扇山、連絡先: 別府八湯まつり実行委員会)
- 4月上旬 塩塚高原野焼き (場所: 愛媛県四国中央市・徳島県三好市、連絡先: 四国中央市観光協会・三好市役所)

※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 33 2018年1月号

全国草原再生ネットワーク事務局

〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1

NPO 法人緑と水の連絡会議内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-84-0262

【編集後記】はやいもので、「第12回全国草原サミット・シンポジウム in 串間・川南 (宮崎) 大会」まで、5ヶ月近くとなりました。ニュースレターの原稿にもありますが、シンポジウムの分科会のテーマも決まり、また、1月下旬には参加申込が始まります。5月の連休明けで、気候的にも良い季節と思います。ネットワークの会員からも、たくさんの参加があるように、大会へのご協力をお願いします。